

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
川端渉		人の心に到達できるコンテンツを制作されており、ある意味「本質に迫っている」という点が、アート作品を制作する時と似ている。これがコンセプトとなり、意味や芯があるため、人間の感情にダイレクトに響くのだと思う。イメージとしては、「感動」ではなく「圧倒」のように。	
杉原環樹	スタディのアーカイブに関わるライターとして参加していますが、個人的にも清宮陵一さんの模索されている音楽の新しい領域に関心があります。新しい領域は新しい領域ゆえに、「言葉以前の感覚」のなかで揺らいでいるもの。このスタディを通して、そこからどんな音楽の姿が見えてくるのか、それをどのように言葉にすればいいのかを、同席させてもらいながら考えていきたいです。	<p>広告と音楽の新しい結びつきを模索するブルース・イケダさんの実践は、なぜか普段、自分ではなかなか興味を持つことのなかった分野だった。その意味で、その領域の一線で活躍する人の話を聞いたことは、単純に新鮮で面白かった。</p> <p>特に興味深かったのは、広告の世界で時代ごとに更新される「モード」のようなものの存在だ。ブルースさんの話によれば、YouTubeなどが登場した2000年代後半、かつては分けて捉えられていた一般企業の広告と実験的な音楽の世界が結びつき始めた。企業はそれまでにない「branded content（コンテンツとしての広告）」を求めようになり、広告の質が変わった。また近年は、映像の世界を飛び出して、現実空間に展開される一種のインスタレーションとしての広告が多くなっているという。</p> <p>こうした動向は、人々の欲望の写し鏡のようで興味深かった。</p> <p>だが、今回一番ハッとさせられたのは、「音楽の公共性」についてのことだ。</p> <p>「最近、公共空間に音楽をどう組み込むかを考えている」というブルースさんが、今後やりたいことの具体案として、虎ノ門や大手町などでの都市型フェスを挙げたとき、正直に言うと、自分の考える「公共」というもののあり方との齟齬を感じた。端的に言って、自分がいま関心を持つ「公共」とは、たとえば何でもない住宅街で、人々の普段の生活との絡み合いから見出される、はるかに地味なものだったからだ。その意味で、「都市の屋外空間でフェスをやる＝公共」という発想は、やや前時代的なものを感じたのも事実である。</p> <p>ただ、スタディの終了後、そのことを清宮さんに伝えると、「でも、渋谷のスクランブル交差点で新しい音楽と人との出会いを作ることも、やっぱり公共だよね」（意訳）と言われ、ギクッとした。たしかにその通りで、自分は無意識のうちに、「公共」のなかにある種のグラデーションを作っていたのだと気がついた。街に溶け込む地味な音楽のあり方も、街中で宣伝という名目で鳴らされる大音量の音楽も、「公共」に関わるものであることに変わりはない。その当たり前の視点をあらためて感じられたのが、今回の最大の収穫だった。</p>	ブルースさんの存在は、これまでのこのスタディのなかでも異質なものだったと思う。けれども、それは、いま音楽というもののあり方を考えるうえで、必要不可欠のピースでもあった（現実には、広告を通して新しい音楽と出会う人は多いのだし）。その意味で、音楽を、さらにバリバリのビジネス側の視点から見ている人の話も聞けると面白いのではないか、と感じた。
村瀬朋桂		<p>話の中で、頻繁に「良質な」という表現が出ていたが、自分にとっての良質な音楽や、良質なコンテンツってなんなのか？と改めて考える場となった。</p> <p>売れているものなのか？多くの人が知っているものなのか？</p> <p>自分がよいと思っている音楽イベントに、人がこないのはコンテンツが悪いからなのか？人々が求めているものってなんなんだろう？</p> <p>良質なコンテンツは時代によっても変化するし、音楽とカルチャーは切り離せないで、常に新しいことを体験しながら、本物を提供し続けてるからこそ、時代が変わっても人の琴線に触れるコンテンツが作れるんだろうか。軸がブレないように、自分がいいというものを常に確かめている印象を受けた。筋トレに近いかもしれない。</p> <p>私自身、常に興味のあるものを棚卸しして、アップデートさせながら、根幹がぶれないようにしたいと思った。今回のお話では、自分のテーマではなく、その取り組み方や、向き合い方というところで考えを整理する機会になった。</p>	ブルース・イケダさんの手がけていた映像が、ずっと好きで見続けていたものばかりでその話を聞けただけでも感動でした。昔見た、HIFANAとNIKEの映像は本当に衝撃的だったので、一時期ずっと見ていた記憶があります。ここで見れるとは思わなかったのも、お話を聞いて単純に感動です。
宮内俊樹 (名小路浩志郎)	初期衝動とクリエイティビティとアートフォーム	<p>「情報爆発ないま、琴線に触れるコンテンツを作るときに音楽の持つ力」「JKDは”アーティストrep”みたいなもの」「シンクロニシティも大事にしている」というブルース・イケダさんのインサイトがとても独特な活動だな感じた。</p> <p>学びは、クリエイティブと音楽が密接に結びついている点。結局は初期衝動とクリエイティビティこそが音楽を含む芸術表現の源泉であり、それをいかなるアートフォームで表現するかによって音楽になったりアートになったり、広告になったりもする。</p> <p>その境界やすき間もありうる。ボーダーを攻めるのも面白かったりする。カテゴライズの無意味さを感じると共に、既成のアートフォームにしばられるケースもあると思う。が、評論に値すべきは、初期衝動とクリエイティビティである。</p>	